

## はじめに 鶴見和子文庫の紹介

西川 祐子

2006年7月に亡くなった鶴見和子さんの蔵書およびフィールドノートをはじめとする草稿類は、京都府宇治市にある京都文教大学の図書館に大切に保管されている。最初の寄贈は、鶴見和子さんが1995年に病に倒れ、やがて京都の南、宇治市にある介護付高齢者ホームゆうゆうの里に入居される決心をなされた直後のことであった。それは京都文教大学の開学からまもない時期でもあった。そして、療養生活に入られた後も以前にも増して充実した研究と執筆をつづけられた最後の10年間、宇治ゆうゆうの里の個室に置かれていた蔵書と資料もまた、2006年8月にご遺族鶴見俊輔氏からご寄贈いただいた。研究者の個人文庫が散逸することなく一箇所に集められ、その一部が公開されている数少ない貴重な例であると思われる。

京都文教大学図書館所蔵の鶴見文庫、鶴見和子文庫は、三部門に分かれている。第一に鶴見和子さんの蔵書であった単行本と叢書、全集類は図書館方式で分類整理したのち、「鶴見和子文庫」として開架の一箇所に集め、一般の利用に供されている。図書館にすでに同一本がある場合も、鶴見和子文庫に残し、ひとりの研究者が1940年から95年までご自身で選んで書庫におかれた書物を一かたまりの文庫として目にみえる形で保存し、その上で自由に閲覧に供してほしい、と和子さんが望まれたその方針がまもられている。図書館の記録によると、通算の利用回数が多い本が多数ふくまれている。第一回寄贈図書は約5200件、現在整理中の第二回分が約800件である。これを京都文教大学では「鶴見和子文庫」と呼びならわし、書籍は開架本棚に置かれ、図書館の他の本と同様に一般に大いに利用されている。

第二の、小冊子、雑誌、研究資料、カード、ノート類またAV資料の部門は「鶴見和子文庫未公開部分」である。台帳記載をほぼ終えた寄贈第一回分と台帳作成を開始した第二回分を合わせて改めて整理しなおす必要があり、現在、作業中である。1940年代、50年代に刊行された冊子類、また手稿、ノートなどは紙の劣化が進行しており、デジタル化した上でなければ公開がむずかしい。そのための予算と人手の確保を検討しなければならない。件数は数え方によるためまだ不明であるが、6000点を越える。

第三部門は、鶴見祐輔蔵書のうち、トーマス・ウッドロウ・ウィルソン米国大統領の伝記を書く目的で収集された文献、時代考証資料、明治政治家の正伝類、また祐輔氏自著類から成っている。鶴見和子、俊輔姉弟は、父祐輔氏の数多い伝記執筆のなかでももっとも精魂こめた作品となるはずであったのに完成されなかった計画を形あるものとして想像する手がかりとして自宅に残しおかれていたのであった。この中には前世紀の両世界大戦間の世界の状況を知るための貴重な資料が集められている。約2000件のなかにはすでに刊行後100年を越える書籍が多く含まれているため、温度湿度調整のある小室に保管され、閲覧には特別許可が必要となっている。図書館内では、この第三部門を第一、第二部門と区別して「鶴見文庫」と呼んでいる。ご寄贈の時期は第一、第二部門に先立つものであった。なお、本学の開学当時には、鶴見和子さんの甥にあたる鶴見太郎氏が助手として在籍しておられ、鶴見文庫、鶴見和子文庫の整理、分類の指導にあたられた。

最初のご寄贈をいただいた当時、新設大学のつねとして本学も書籍といえば1990年代以後に出版された本ばかりであって、それ以前に出版された書籍は復刻版、新版、あるいは古書購入したものしかない状況にあり、鶴見和子文庫、鶴見文庫の存在はたいへん貴重であった。利用者が多いのも一つにはとくにいわゆる戦後思想を考えると、鶴見和子文庫の開架本棚そのものが一個の資料体をあらわしている点にある。

しかし、大学や図書館は当然のことながら、学生だけでなく教職員も来たりて去る場所である。開学と鶴見和子文庫第一次寄贈当時の記憶もまたしだいに薄れる。そこで本学人間学研究所は記憶の復

活とあたらしい意味づけをめざして、2006年度の企画として図書館との共催による「鶴見和子の仕事と鶴見和子文庫から思想と方法論の水脈をさぐる」というタイトルの連続シンポジウム全4回を企画、同年6月にその第一回を開催した。この長いタイトルには、わたしたちの試行錯誤、次世代へと言葉と思想をリレーする方法をさぐる手探り状態の表現と将来に託する希望をこめた。そして同年7月に思いがけないことに、鶴見和子さんの訃報に接することとなる。ついで夏休み中の8月に、鶴見和子文庫への追加の寄贈をいただいた。

荷物の到着の日、あらたにご寄贈をいただいた図書、資料類の山を前にして、一人の研究者のいわば一生の仕事の跡を形あるものとして拝見し、図書館と研究所のスタッフ一同、感慨と保管の責任感に胸つぶれる思いで立ちすくんでいた。さっそく整理にとりかかった図書館の作業と平行して、研究所では資料体全体の今後の研究方針の検討にとりかかった。連続シンポジウム第2回以後の計画についても見直しの必要のあるなしを検討した結果、ほぼ当初の企画どおりに進行させるという結論に達した。昨12月の第四回をもって全計画をおえることができた。4回のシンポジウム趣旨説明は、鶴見和子文庫をさまざまな角度から紹介している。

なお、京都文教大学人間学研究所では、鶴見和子文庫の第一回寄贈をうけた2年後、1999年4月30日に、『鶴見和子曼荼羅』（全8巻、藤原書店）刊行記念のシンポジウム「生命のリズム—倒れて後に思想を語る」を京都市内の京大会館で開催しており、京都文教大学人間学研究所発行の『人間学研究』第一号(2000年4月)に、その記録が残されている。今回の連続シンポジウムは、その続きとしても企画した。